国際コミュニケーション学部 異文化コミュニケーション学科
1期生（3年次）

海外研修留学レポート

新たな発見の日々

韓国　久徳 優衣

専修大学での2年間の韓国語や文化の学びを経て始まった韓国留学は、新たな発見、経験の毎日でした。

私が通っていた語学堂には、さまざまな国からたくさんの人が韓国語を学びに来ていました。韓国語を学びたい、上達したいという共通点があるため、クラスメートともすぐに打ち解けることができました。

留学当初は言いたい表現がすぐに出てこないなど、もどかしい思いもしましたが、授業中の発言やグループワークを通して学んだ表現を積極的に使う努力をしました。ほかの国から来た異なる母国語を持つ友達と韓国語で意思疎通ができたときはとてもうれしく、もっと上達したいという思いが強くなりました。

学校の文化体験では、伝統的な王宮や歴史博物館を訪ねたり、ミュージカルを鑑賞したりしました。さらに春学期と夏学期の間の3週間の休暇では慶州や釜山、済州島などに行き、それぞれの地域の特色を感じながら、さらに韓国に対する理解が深まりました。

約半年間の韓国留学は、韓国語はもちろん、さまざまな人と関わりながら自分の成長につながる貴重な経験になりました。

語学堂卒業のクラス写真。前列右が久徳さん

ドイツの食文化を楽しむ三宅さん（左）と佐々木さん（右）

思いやりのあふれる街で

スペイン　津田 夕希

コロナ禍で延期となった海外研修。ドキドキしながら、まだ肌寒い3月末、スペイン・グラナダに到着した。

初めはうまく話せなかったけれど、夕食前に日記を書き、その内容を基に積極的にファミリーと会話した。徐々に耳が慣れ自信がつくと、会話がより楽しくなった。

語学学校の日本語クラスとの交流会のあとに（右から2人目が津田さん）

特に、ファミリーや友達と冗談を言い合い、一緒に笑えた瞬間には大きな喜びを感じた。

しかし、このような成長の一つは、簡単な表現を心掛け、何度もフレーズを繰り返してくれる周囲の人たちの支えがあってこそだと気付く。スペインの人たちの思いやりにならい、私自身も、誰に対してもそうした優しい気持ちを向けられる人になりたいと心から思う。

休日に訪れたアルハンブラ宮殿は、何度も行きたいと思える圧巻の世界遺産だった。土産物屋では「日本から来たの！Kawaii！」なんて言われることもあり、知らない人との会話も楽しめるのがこの街の魅力の一つだ。また、バルでタパ（おつまみ）を堪能し、一人前のグラナディーノになりきる時間が私のお気に入りである。

待ちに待った留学は、周囲の力を借り、想像以上に刺激にあふれた素敵な冒険になった。

¡Muchísimas gracias!……

Danke,Leipzig!

ドイツ　三宅 真央　佐々木 里沙子

ドイツのライプツィヒで過ごした4カ月間の中でも、食を通してドイツ文化を体験した出来事が強く心に残っています。

ある週末、"KANDLER"というカフェで朝ごはんを食べました。私たちは、生ハム、チーズ、メットヴルスト（*Mettwurst* 保存処理をした生の豚肉）、ゆで卵、ドイツの小さいパン（*Brötchen*）、バターのセットを注文しました。

周りのまねをして、パンに切り込みを入れ、バターをたっぷりと塗り、具材を挟んで食べました。生の豚肉には初めは抵抗がありました。しかし食べてみると、何度も食べたくなるような味で、私たちは朝食後、スーパーでこの商品を探し求めたほどです。

また、エッグスタンドに乗ったゆで卵の食べ方が分からなかったため、後日友人に教わりました。ナイフの背で卵上部を割り、切り取ってスプーンで中身をすくって食べるそうです。週末にゆったりと楽しく朝食をとることで、贅沢な気分になりました。

勉強の合間には、現地の大学生や、留学生とピクニックやスポーツをしたり、オーケストラやオペラを鑑賞したりもしました。

日々ドイツ文化に触れ、充実した留学生活を送ることができました。

KANDLERの朝ごはん

国際コミュニケーション学部

日本語学科が覚書締結

森村学園国際交流・多言語教育センターと

国際コミュニケーション学部日本語学科は8月5日、森村学園中等部・高等部「国際交流・多言語教育センター」（横浜市）と、連携に関する覚書を締結した。

同センターは森村学園のグローバル教育を担う機関で、留学の送り出し・受け入れをはじめ、多文化共生プログラムなどを実施している。

覚書の締結は、教員間の交流を深め、中等教育と大学での国際交流・言語教育の接続と活性化を目的とする。主な活動として、日本語学科は、森村学園が受け入れた留学生に対する日本語教育について協力・助言を行う。また森村学園は、国際理解教育や語学教育の現場で、日本語学科に対し随時見学の機会を提供する。

同日は、髙橋雄一日本語学科長と、松本浩欣センター長が覚書を交わした。斎藤達哉学部長は「国際交流、多言語、国語教育、日本語教育など、センターと本学部は共通している。さまざまな形で緊密な連携を進めたい」と述べた。

覚書を交わす髙橋学科長（右）と松本センター長

国コミュ学部長賞に土屋さん

国際コミュニケーション学部の学部長賞に土屋香琳さん（2年次）が選ばれ、7月22日に授与式が行われた。

土屋さんは昨年度の日本語教育能力検定試験に合格した。斎藤達哉学部長から賞状を受け取り、今後の活躍を誓った。

スポーツ研＆文・齋藤ゼミ「こころ」のきたえ方解説

7月28日に行われた公益財団法人野球殿堂博物館の夏休みイベント「『こころ』をきたえる～スポーツや勉強もどんどん上達！～」に、専修大学スポーツ研究所と文学部ジャーナリズム学科の齋藤実ゼミが協力した。小学生を対象としたオンライン講義を開催し、メンタルトレーニングの重要性などを伝えた。

野球殿堂博物館と日本野球機構（NPB）のコラボ企画「野球の学校」の一環。スポーツ心理学が専門の佐藤雅幸経済学部教授が講師を担当し、メンタルがプレーに与える影響を分かりやすく説明した＝写真。

スペシャルゲストとして、ヤクルトスワローズなどで活躍した元プロ野球選手の大引啓次さんも参加し、「緊張とうまく付き合うことで実力以上の力が発揮できる」と、チャンスやピンチの場面での心構えを語った。

ゼミ生たちは、深呼吸による緊張の緩和、イメージトレーニングやフィードバックの効果などを確かめる検証動画を作成し、結果を報告。川口結菜さん（文3）は「小学生は、今回のイベントで学んだことを今後に生かしてほしい」と話した。

緑地帯

道

スペインの詩人アントニオ・マチャードの有名な詩にこんな一節があります。

「道ゆく人よ、道は君のたどってきた人生そのものでそれ以上ではない。道ゆく人よ、道はない。道は歩くことによってできる」。マチャードは続けます。「後ろを振り返っても見えるのは戻ることのできない道だけだ」。

誰しもこれまでの人生で、そしてこれからの人生でどの道を進んでいけばいいのか、迷うことがあると思います。あの時、ああしていればなあ、と後悔をすることもあるでしょう。しかし常にいずれかの道を選んで進んでいかなければなりません。でも、道は一つだけではないのです。

先日、イギリスのハル大学から名誉博士号を授与されたクィーンのブライアン・メイは授賞式典に寄せたビデオメッセージで次のように語りました。「もしアドバイスをするとすれば、一歩を踏み出す時は大きな一歩を踏み出しましょう。いつでも後から戻ってもう一つの別の大きな一歩を踏み出すことができるのですから」と。

ブライアン・メイはミュージシャンとして大成功を収める傍らで天文学の博士号を取得しています。彼が大学で物理学を学び始めたのは1965年、天文物理学博士号の取得は2007年、実に40年以上の月日が流れています。彼はミュージシャンでありながら、学問への情熱を持ち続けたのです。道は一つではないのです。皆さんも迷うことがあったら、こうした言葉を思い出してみてください。

（学生部委員・砂山充子）